talk! talk! talk! アルピニスト・野口健さん

アルピニスト

野口健さん

アルピニストとして、世界の山を登り、また環境問題を訴え続ける野口さん。13歳のとき父親に買ってもらったNikonFM2とともに、これまで多くの地を歩いてきた。野口さんがシャッターを切るのは、国々の美しい街並から、環境問題の現場まで、多くのシーンに渡る。何十回と登ってきた山の新たな発見を見出せるのがカメラだという野口さんに、写真を撮り続けることで見えてきたことをうかがいました。

プロフィール

のぐち・けん　1973年生まれ。アルピニスト。25歳のとき七大陸最高峰登頂世界最年少登頂記録を樹立。山岳活動を続けながら、1997年にエベレストに捨てられた大量のごみを映像で発信後、清掃登山を開始し、世界中から注目を集める。その後富士山やマナスルなど各地で清掃登山を行う。2003年には野口環境学校をスタートさせるなど精力的に活動をしている。2008年、遺骨収集活動を開始、2011年、センカクモグラを守る会を設立するなど、活動の場を自ら広げ続けている。

Beginning 出会い

13歳のとき、父に買ってもらった愛機・FM2

カメラを手にしたのはいつ頃ですか？

初めてのカメラがNikonFM2です。今も現役で使っているので、25年選手ですね。七大陸制覇にも付き合ってもらった愛機です。私は子どもの頃、フォトグラファーへの憧れがあったので、中学生になったら写真部に入ろうと思っていました。しかし写真部で写真を撮るにも、カメラがないといけない。カメラのカタログを何冊も読んだのを覚えています。

数あるカメラの中から、NikonFM2を選んだ決め手は何でしょうか？

今程ではないにしろ、カメラの性能はさまざまで、たくさんの候補があったのですが、星を撮りたいと思っていた私にとって、NikonFM2は寒さに強いという特徴が魅力的でした。当時はそんなに耐久性に優れたカメラがありませんでしたから。シャッタースピードが1/4000だという点も決め手の一つでした。当時のカメラでは最速だったのではないでしょうか。

13歳でNikonFM2を購入するのは大変だったのでは？

もちろん自分では買えないので父に買ってもらったのですが、何しろ高い買い物ですから、きちんと作戦を練って、購入してもらうに至りました（笑）。当時私は、仕事の都合でイタリアにいた父の家に滞在していましたが、NikonFM2の現物がそこにはなかったので、すぐには買えませんでした。兄がいる日本に行ったとき本物のNikonFM2を触って、やっぱりこれだ！　と確信しました。そこで、イタリアに帰ってからというもの、父の機嫌がいいときを見計らっていたのです。ある日、父が晩酌で、お酒が入って上機嫌になっている姿を確認した少年時代の私が「中学生になったら写真部に入りたいんだけれど、カメラがないんだ」というと、私の狙い通り父は「じゃあカメラを買ってやる」といったのです。すかさずカタログを持ってきて、このカメラがいい、とNikonFM2を指差しました。私のたくらみを知らない父は、二つ返事でOKです（笑）。父の気が変わらないうちに日本にいる兄に電話をし、NikonFM2を買って送ってほしいと告げ、父に電話をかわって了承の証拠を兄に聞かせました。兄も何が何だかわかっていませんでしたが、とりあえず、カメラを買って送るんだということだけはわかってもらえたようで、見事NikonFM2を手にすることができたのです。気がかわっては大変ですから、カメラが届くまではこの話題は一切せず、届いてから「ありがとう！」といったら、案の定「なんだそれは」と言われましたが（笑）。

見事な作戦勝ちですね！　少年時代は、どんな写真を撮られましたか？

父の都合で外国に行くことが多かったので、いろいろな国の街並を撮っていました。やはり国によって風景が全然違うので、撮りがいがありますね。白黒写真を撮ることが多かったのですが、現像も自分でやって、今思うとかなり本格的だったのではないでしょうか。

Pleasure 楽しみ

ものごとのB面を伝える手段として写真を撮る

少年時代にNikonFM2を手にし、現在まで使われているとのことですが、ずっと写真を撮り続けていらっしゃったのですか？

高校１年生のとき山に出合い、ヒマラヤに登り、七大陸最高峰登頂の夢が生まれました。大学生の頃になると登山活動が主になり、カメラはあまり使っていませんでした。というのも、その頃は自分たちの冒険活動をビデオに撮っていたのです。多くの方に活動をわかりやすく知ってもらうためには、動画が最適でした。エベレスト登頂の頃までは、カメラよりもビデオを手に動くことが多かったように思います。

カメラから離れても、何かに残し、伝えるということを続けられていたのですね。

思えば昔から、「何かを伝えたい」という気持ちが強かったように思います。山を登るにしても、ただ登って降りてくるのではなくて、そのなかでいろいろな事実があります。富士山に捨てられているゴミもそうです。そして、誰かに何かを伝える手段として、写真や動画というのは、ダイレクトに伝わる有効な手段だと思うのです。

写真や動画で、野口さんが伝えていきたいものとはどのようなものでしょうか。

ものごとには、必ずA面とB面があります。美しい街並というA面があるその同じ国で、少し離れると貧困に苦しむ人々がいるというB面が存在している。けれどB面を意図的に写さず、伝えないことが簡単にできてしまうんです。私は活動のなかで、A面はもち

ろん、たくさんのB面を見てきました。それを知った私が、伝えていかなくてはと思うのです。得てしてB面は伝わりにくいので、写真や、あるいは動画を使って伝えていきたいのです。ただ動画は発表の場が限られていて、ホームページでも見てもらうのに敷居が高いようです。その点写真は、見てもらいやすいので伝える材料としては最適といえますね。

Photo's 作品紹介

Future これから

カメラは、何十回も登った山の違う景色を見せてくれる

山を登っているときの写真に、テーマはありますか？

自分でテーマを見つけるというより、最近はツイッターでフォロワーの方から写真のテーマをリクエストされるので、今まで思いもよらなかった写真が撮れています。ヒマラヤに登る前に「風」というテーマをもらったときは頭を捻ったものです。風を動画で撮るのは、音も、時間も入るので表現できますが、写真はそうはいきません。到着して、早く寝たいと思いつつ、ダウンを着込んでカメラを構え、何時間も風を写真で表現できる瞬間を狙いました。そのおかげで疲れはしたけれど、50回以上遠征を行ったヒマラヤの新しい顔を発見できたのです。

カメラによって、山の良さを再発見されたのでしょうか。

いちばん最初に登ったときのワクワクした感動というのは、ずっと同じではなくて、ある程度慣れてきます。新鮮味がなくなってきていたのですが、写真を撮ることで新しいワクワク感が生まれてきました。「今度は何が撮れるかな？」という楽しみは、カメラならではですね。感動したことを誰にも伝えなければ自己満足ですが、写真を通して人に感動を伝えられるから、ワクワクします。私自身が山に登る楽しみを、カメラは何十倍にもしてくれるのです。

これから撮ってみたい写真はありますか？

白黒写真にこだわってみたいなという気持ちがあります。広い氷河のなかに、人間がぽつんといる写真を白黒で撮ったのですが、人間の小ささや大自然の中での弱さ、そして健気さがよくわかるんです。でもそれは白黒でなくては伝わらないものでした。美しいカラーでその写真を撮ってしまったら「何となくキレイな写真」で完結してしまっていたような気がします。私は誰かに伝わる写真を撮っていきたいので、それには白黒写真にこだわるのも面白いのではないでしょうか。

これから使ってみたいカメラはありますか？

久々にフィルムカメラを使ってみたいなと思っています。１秒１秒、そして１枚１枚の重みがフィルムカメラにはあって、デジタルカメラにはないワクワク感があるんです。何かを始めるときはすべてにワクワクしますね。だから、私にとってはNikonFM２がワクワクする象徴です。手にすると、あの頃のワクワク感が蘇ってくる。これからもワクワクするような写真を撮っていきたいですね。

野口さんのワクワクする、そして力強いお写真がこれからも楽しみです。ありがとうございました！

コンテンツトップへ戻る

※掲載している情報は、コンテンツ公開当時のものです。

株式会社ニコン 映像事業部
株式会社ニコン イメージング ジャパン

© 2019 Nikon Corporation / Nikon Imaging Japan Inc.